

令和7年度

授業改善推進プラン【小学校】

- ①令和7年度北区立小学校学力向上を図るための全体計画(様式1)
- ②令和7年度第2～6学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析(様式2)
- ③指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 4教科(様式3)

東京都北区立赤羽台西小学校

令和7年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	○教科全体では、各学年とも区、全国平均を上回っている。 ●「情報の扱い方に関する事項」では、6年生が区平均よりも5. 6、4年生が0. 3ポイント下回った。
社会	○教科全体では、各学年とも区、全国平均を上回っている。 ●5年生の「自然災害からくらしを守る活動」の領域が区の平均を0. 2ポイント下回った。
算数	○教科全体では、各学年とも区、全国平均を上回っている。 ●「データの活用」の領域で2年生は、1. 6、6年生は1. 3、また、「図形」の領域で4年生は1. 6ポイント区平均を下回った。
理科	○教科全体では、各学年とも区、全国平均を上回っている。 ●同一学年としてR6とR7の経年変化を見ると、5学年は、1. 4ポイント上がり、4・6学年は達成率が下がった。
英語	○教科全体では、各学年とも区、全国平均を上回っている。 ●同一学年としてR6とR7の経年変化を見ると、達成率が2. 5ポイント下がった。

本校が児童に育成したい力	
○柔軟な思考力、判断力や豊かな創造力・表現力をもつ子ども。（「工夫する子ども」） ○豊かな感性、規範意識、他人を思いやる心など、豊かな人間性をもつ子ども。（「協力し合う子ども」） ○主体的に社会の変化に対応しながらその発展に寄与できる健やかな心と体をもつ子ども。（「やりぬく子ども」）	

校内における学力向上推進体制	
○主体的・対話的で深い学びになるよう、新聞や読書、「きたコン」等を活用した授業研究を行い、教員一人一人の授業力の向上を図る。 ○算数科における習熟度別指導、理科支援員・学力パワーアップ講師等による学習補助により個に応じた指導の充実を図る。	

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法 の工夫	教育課程編成上 の工夫	校内における研究 や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との 連携の工夫
○よりよい学びの集団づくりの中で、主体的に学ぶ子どもを育成する。 ○児童が目的意識をもち、自己決定できる授業を展開できるよう「どうしたい?」「そのためにどうする?」などの問い掛けを工夫する。 ○算数科では、3～6年に習熟度別による少人数指導を実施し個に応じた指導の充実を図る。 ○体験的な学習を充実し、実感を伴った理解ができるようにする。 ○GIGAスクール構想の下、ICTを効果的に活用し、分かりやすい授業を工夫する。	○低学年は、週2、3日、「朝読書」の時間、また、全学年週に1回、NIEの時間を設け、「読む力」を育成する。 ○週2～3日朝の活動の時間に「外国語（5・6年）」を取り入れ、外国語の時間を充実させる。 ○教育活動の精選・見直しを通して、授業時数の確保に努める。 ○放課後、「学力フォローアップ教室」を活用し、基礎学力の定着を図る。	○「赤西小学学習しぐさ」を作成し、授業規律を確立することで学習の意欲を高める。 ○「自ら学び、互いに高め合う児童の育成」を研究主題として「児童の交流のよさを実感し、自ら対話的に解決に向かう姿を目指して」研究を推進する。また、全教員の公開授業を通して、授業改善を図る。 ○パソコン研修を定期的に行い、教員の積極的なきたコンの活用を促す。	○算数科においては加配教員と担任で児童の理解を確認するとともに、学年全体で評価し指導に生かすサイクルを確立する。 ○授業改善推進プランの取組状況について、教員が定期的に評価する。	○コミュニティ・スクール12年目となり、スクールコーディネーターと連携し、保護者・地域の方々の協力を得ながら、教育活動を行う。 ○新たな教育活動に取り組み、学校公開・授業公開、学校便り・保護者会、HP等により積極的に教育活動の様子を発信し、理解を得るようにする。

本校の教育目標	
○工夫する子ども ○協力する子ども ○やりぬく子ども	
学力向上に関わる経営方針	
方策1:授業の熱くなる学校 【児童が目的意識をもち自己決定できる授業改善】 方策2:きたコンの活用 【探究し、思考・判断・表現するツールとしての「きたコン」の活用】 方策3:全教員の授業力向上 【授業観察3回・授業は全教員に公開し、相互授業観察の記録】 方策4:赤西小学学習しぐさの徹底 【学習規律10項目の日常化】 方策5:指導教諭の模範授業・協議会の参加、還元【報告レポートの共	

〔様式2〕

令和7年度 第2学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析

東京都北区立赤羽台西小学校

国 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
校内平均正答率は、「おくりものについてはなしあう」と「かん字をかく」において区の平均正答率をわずかにだが下回った。それ以外の内容は区や全国の平均正答率を上回った。特に「せつめい文をよみとる」では、10.6ポイントと大きく上回った。	観点別正答率を見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現」の2観点いずれも区や全国の平均正答率を上回った。	「基礎」も「活用」も区や全国平均正答率正答率を上回った。「おくりものについてはなしあう」では2.4、「かん字をかく」では1.1ポイント、それぞれ下回っているが、全国平均正答率正答率と比べると2.4、4.6ポイント上回っていた。漢字の読み書きについては、個人差が大きく、基礎の定着を図る個別の支援が必要である。校内の平均正答率は84.0と区や全国と比べても高い水準にある。
算 数		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
校内平均正答率は、「120までのかず」「3つのかずのけいさん」「えをつかったグラフ」の3点が、区の平均正答率を下回った。その他の点については、区・全国の平均正答率を上回った。	観点別正答率を見ると、「知識・技能」が、区の平均とほぼ同率であり、「思考・判断・表現」は、0.9ポイント上回った。	「基礎」の部分では、区の平均正答率より0.9ポイント下回り、「活用」については、4.3ポイント上回った。「基礎」では、特に区の平均正答率より下回った「120までの数」「3つの数」「絵を使ったグラフ」の3点を中心に基礎の定着を図る必要がある。

〔様式2〕

令和7年度 第3学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析

国 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
校内平均正答率は、「情報の扱い方に関する事項」を除き区内平均正答率を上回った。情報の扱い方に関する事項は区内平均正答率と同じ結果となった。書くことは、読むことと比べて区内平均を下回る結果となった。	「知識・技能」は3.9ポイント、「思考・判断・表現」は3.1ポイント区の平均正答率を上回った。	「基礎」の部分では、区の平均正答率より4.1ポイント上回り、「活用」については、2ポイント上回った。漢字の読み書きや語彙の量については個人差があるものの、よくできている児童が多いが、ことばの共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係についての理解は誤答が多かった。
算 数		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
校内平均正答率は、全ての内容で区の平均正答率を上回った。区の内容別結果と同様、「はこの形」は他の内容と比べて正答率が低い傾向にある。	「知識・技能」は12ポイント、「思考・判断・表現」は14ポイント区の平均正答率を上回った。	内容別・観点別共に区の平均正答率を10ポイント以上上回っている。しかし個別に見ると平均正答率に達していない児童も数名いる。

〔様式2〕

令和7年度 第4学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析

国 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
全ての内容で区平均正答率を上回った。特に「漢字を書く」は10. 9ポイント、「文章を書く」は9. 4ポイント上回った。	「知識・技能」は4. 9ポイント、「思考・判断・表現」では4. 3ポイントと、2つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」、「活用」共に北区の平均正答率を上回ったが、平均正答率まで達していない児童も数名いて、個別の指導が必要である。また、領域別正答率を見ると、「情報の扱い方に関する事項」や「我が国の言語文化に関する事項」で区の平均正答率をわずかに下回った。
算 数		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
ほとんどの内容で区平均正答率を上回った。ただし、「円と球・三角形」は、区平均正答率より1. 6ポイント下回った。	「知識・技能」は2ポイント、「思考・判断・表現」では3. 1ポイントと、2つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」、「活用」共に北区の平均正答率を上回ったが、平均正答率まで達していない児童も数名いて、個別の指導が必要である。また、領域別正答率を見ると、「図形」の領域において区の平均正答率を1. 6ポイント下回った。
理 科		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
ほとんどの内容で区平均正答率を上回った。ただし、「こん虫のからだのつくり」では、区平均正答率より2. 1ポイント下回った。	「知識・技能」は2. 1ポイント、「思考・判断・表現」では4. 5ポイントと、2つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」、「活用」の正答率および領域別正答率のすべてにおいて北区の平均正答率を上回った。一方で平均正答率まで達していない児童も数名いて、個別の指導が必要である。

〔様式2〕

令和7年度 第5学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析

国 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
すべての内容で区平均正答率を7～9ポイント程度上回った。文章を書く内容では13ポイント上回ったが、他の領域に比べて正答率が低い。	「知識・技能」「思考・判断・表現」の2つの観点で、いずれも区平均正答率を5ポイント以上上回った。	「基礎」「活用」「観点別」共に区平均正答率を上回ったが、自分の考えとそれを支える事例の関係を明確にして書く問題は、正答率が36%ほどで、目標値を下回った。
社 会		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
すべての内容で区平均正答率を上回り、特に、「都道府県の様子」では16・3ポイント上回った。「自然災害からくらしを守る」では区平均正答率を0・9ポイントとわずかに上回ったが、目標値と比べると2ポイント下回った。	「知識・技能」は8・1ポイント「思考・判断・表現」は3ポイントと、2つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」「活用」共に、区平均正答率を上回ったが、自然災害からくらしを守る活動のように基礎的な知識が身に付いていない領域もあり、繰り返し丁寧な指導が必要である。
算 数		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
すべての内容で区平均正答率を上回った。特に、「折れ線グラフと表」「いろいろな形」は12ポイント以上上回った。	「知識・技能」は7・5ポイント「思考・判断・表現」は8・7ポイントと、2つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」「活用」共に、区平均正答率を上回ったが分度器の目盛りを読み取る問題は区平均正答率を下回り、ひし形の作図においては正答率6割を切っている。基礎的な知識・技能が身に付いていない領域もあり、測り方、書き方等を個別に丁寧な指導が必要である。
理 科		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
多くの内容で区平均正答率を上回ったが、「1年間の動物の様子」では2・6ポイント、「電気のはたらき」では0・5ポイント区平均正答率を下回った。	「知識・技能」は3・6ポイント「思考・判断・表現」は6・4ポイントと、3つの観点でいずれも区平均正答率を上回った。	「基礎」「活用」共に、区平均正答率を上回ったがいずれの領域にも全国正答率を下回った内容があり、その多くが基礎的な知識・技能を問う問題であった。実験や観察の機会や、経験を補う視聴覚資料の活用により、確実に身に付けられるようにする必要がある。

〔様式2〕

令和7年度 第6学年「北区基礎・基本の定着度調査」(北区教育委員会)結果の内容別・観点別の分析

国 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
7つの内容の中で、5つは平均正答率を上回った。「話し合いの内容を聞き取る」は0. 2ポイント、「漢字を読む」は0. 4ポイント、「報告する文章を書く」は3. 7ポイント、区の平均正答率を下回った。	「知識・技能」、「思考・判断・表現」の2つの観点、いずれも区平均正答率を3ポイントほど上回った。	「基礎」、「活用」、「観点別」共に北区の平均正答率を上回ったが、平均正答率まで達していない児童が学年全体の23%おり、個に合った課題を考え、指導する必要がある。
社 会		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
全ての内容で区平均正答率を上回った。特に「日本の農業」、「自然環境と国民生活」は、10ポイント以上上回った。	「知識・技能」、「思考・判断・表現」の2つの観点、いずれも区平均正答率を6ポイント以上上回った。	「基礎」、「活用」、「観点別」共に北区の平均正答率を上回ったが、「国土の自然などの様子」では前年度校内平均正答率より7ポイント下回るため、重点的に指導する必要がある。
算 数		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
一つの内容以外、区平均正答率を上回った。「円グラフや帯グラフ・平均」については、0. 5ポイント区の平均正答率を下回った。	「知識・技能」、「思考・判断・表現」の2つの観点、いずれも区平均正答率を4ポイント以上上回った。	「基礎」、「活用」、「観点別」共に北区の平均正答率を上回ったが、正答率が50%未満の児童が学年全体の18%おり、二極化が見られる。習熟度別指導による個に応じた指導が必要である。
理 科		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
一つの内容以外、区平均正答率を上回った。下回った「魚のたんじょう」は、0. 1ポイント区の平均正答率に届かなかった。「電流のはたらき」については、13ポイント区の平均正答率を上回った。	「知識・技能」、「思考・判断・表現」の2つの観点、いずれも区平均正答率を3ポイント以上上回った。	「基礎」、「活用」、「観点別」共に北区の平均正答率を上回ったが、「魚のたんじょう」では全国と比較しても下回るため、観察実験などの活動の充実がより必要である。
英 語		
内容別結果の分析	観点別結果の分析	内容・観点のクロス分析
「アルファベットの書き」、「英文の完成」、「英作文」の3つの内容で区の平均正答率を下回った。「アルファベットの読み(聞く)」については、10ポイント以上上回った。	「知識・技能」は、区平均正答率を3ポイント上回り、「思考・判断・表現」は、区平均正答率を0. 2ポイント下回った。	意味の理解や聞く内容の正答率は高く、「書く」内容で正答率が下がった。デジタル教材の活用により、聞くことへの指導は充実したが、書く活動を授業の中に適宜取り入れることが必要である。

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	平仮名の読み書きは、ほとんどの児童ができているが、習得に課題がある児童が各学級に数名ずついる。撥音、促音、拗音、濁音等の書き方が定着していない児童は、全体的に多い。	文字を書く機会を徐々に増やし、平仮名を様々な場面で使うことで習得を図る。また、簡単な文を書く活動を行い、その中で注意すべき撥音、促音、拗音、濁音等について指導する。楽しく学習する中で、文字を書くことへの抵抗感をなくす。	習得に困難が見られる児童については、音読や視写することで平仮名に慣れるよう活動を工夫する。また、言葉集めを適宜行って語彙を増やしたり、簡単な作文をする際に文作りのきまりや「は、を、へ」の使い方を確認し、自分の考えを表せるようにしたりする。
2年	正答率は全体的に高い。「情報の扱いに関する事項」の結果は目標値を大きく上回っている。特に校内平均正答率よりも9.6ポイントも目標値を上回っていた。情報と情報との関係について理解した上、相手に伝わるように、経験したことに基づいて話すことを繰り返し、定着を図っていく必要がある。	共通、相違、事柄の順序と情報との関係について理解すること。友達と自分の考えを比べ、同じ部分や違う部分を意識しながら聞くように指導する。最後まで話す、聞くといった指導をし、児童の話す力・聞く力を伸ばしていくようにする。	隣の席同士でペアトークをしたり、グループ内で全員が同じように話したり、互いに聞きあったりする活動を十分にとることで学級全体でも一人で話したり、一人の話を全員が聞いたりできるようにする。
3年	教科の正答率は、全国の平均正答率を約10ポイント上回っている。「言葉の特徴や使い方に関する事項」は目標値よりも8.3ポイント上回っていた。一方で「情報の扱い方に関する事項」では、校内平均正答率が全国平均正答率よりはポイントが上回ってはいたが、目標値よりも6.7ポイント下回っていたため、情報の扱い方に関する指導を繰り返し行っていく必要がある。	情報の扱いについては、国語の時間だけでなく、きたコンを活用する場面で繰り返し指導をする。また文章の中で情報を引用する際にも出典の書き方や伝聞表現の書き方等を学び、書けるようにする。最近の出来事について話すことや文を書く時に手が止まっている児童が散見されるため、興味・関心をもてる課題について文を書くなど自由に書く場を設定し、書くことへの抵抗感をなくしていく。	文章を読む際の漢字は読むことができているが、自分が書く際には適切に使えてはいない。文章の中で使えるよう、漢字の10問テスト時に裏面を利用し、テストで出た熟語を使用した文作りをするなどして、活用できるようにする。
4年	教科の正答率は、「基礎」「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、領域別正答率では、「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」他の領域に比べて、正答率が低く、指導の工夫が必要である。	漢字は読めてはいるものの正しく書けない児童が一定数見られる。学期ごとの50問テストのような大きなテストだけでなく、単元の終わりに10問テストを取り入れたり、漢字ビンゴのようにゲーム性をもたせた学習や言語クイズを取り入れることで、楽しみながら知識を定着できるようにする。	漢字に苦手意識をもつ児童は、これまでの学年までの漢字も定着していないことが多い。過去の内容に遡って、低学年の漢字テストやプリント学習も授業に取り入れ、苦手意識を払拭できるようにする。
5年	教科の正答率は、「基礎」「応用」とも北区や全国の平均正答率を上回っている。しかし、領域別正答率では、「書くこと」が他の領域に比べて、正答率が低く、指導の工夫が必要である。	書くことの基礎となる、文や文章、文の構成等について、きたコンを活用して校正を行ったり、友達と話し合ったりする活動を行う等して、丁寧に扱う。また、身近なことを題材として、考えとそれを支える事例の関係を明確にして書いたり、目的を意識して伝えたいことを明確にして書いたりすることに取り組む。	漢字の読みについては正答率が高いが、日頃の書き取りテストの様子では、苦手としている児童も一定数いる。自分に合った練習方法を考えたり、小テストの取り組みについて確認したりして、定着するようにする。短い作文等の取組により、書くことへの抵抗を少なくする。
6年	教科の正答率は、「基礎」「応用」とも北区や全国の平均正答率を上回っている。しかし、領域別正答率では、「情報の扱い方に関する事項」が他の領域に比べて、正答率が低く、指導の工夫が必要である。「読む」ことの正答率の高さに対して、「書くこと」への課題も見えている。	情報の扱いについては、様々な情報から自分で必要な知識を選び出す機会を繰り返し設定する。言語文化については、意味調べや言葉に注目する投げかけを増やす。また新聞記事を紹介し、児童が関心をもてるように工夫していく。	教科書教材の二十四節気に関する内容や古典文学の学習を通して、日本に昔から伝わる言葉の使い方や人の行動や考え方に触れ、日本文化のよさに気づき、自ら調べ活用する活動につなげていく。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（社 会）

東京都北区立赤羽台西小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	新しく始まった教科であり、児童は興味と関心をもって学習に取り組んでいる姿が見られる。一方で、学習の進め方に見通しをもつことができなかったり、学習のまとめ方のイメージをもてないでいる児童が一定数いる。	児童が学習の流れを理解しやすいように、児童が主体的に「学習問題」をたてることができるように資料の与え方や興味の引き出し方を工夫する。また、学習計画も児童と一緒に作成し、毎時間確認していくことで見通しをもてるようにしていく。	インタビューの仕方、調べて分かったことのまとめ方などは、国語の学習内容として学ぶことができる。国語「仕事のくふうみつけたよ」と社会「わたしたちのくらしとお店の仕事」の学習を平行して進めるなど、「調べ方を学ぶ」→「調べる」のように効率的に学習できるようにカリキュラムマネジメントを行っていく。
4年	都道府県について興味や基礎知識の差が大きい。学習内容を生活と結び付けて考えたり、資料を関連付けながら読み取ったりすることにつまずきが見られる。また、机上の知識として理解はしていても、それが自分の生活に密着に繋がっているという実感をもっている児童が少ない。	都道府県に関するクイズを児童が互いに出し合う、新聞記事から都道府県を探するなど、都道府県に触れる時間を作る。調査活動や映像資料の視聴など、学習内容とをつなぐ展開をし、最終的には自分の生活との関連を考えられるようにする。出前授業や社会科見学を通し、実際に見て経験した上で自分たちの生活にどのように影響しているのかを話し合う活動を取り入れる。	学習して分かったことを実生活と結び付けて考えられるように、自分の興味をもった都道府県を調べ、学習発表し、全体で共有する。また、浄水場のシミュレーションソフトなどの活用を通し、興味をもって課題解決に当たれるようにする。
5年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を上回っている。しかし、領域別正答率では、「自然災害からくらしを守る活動」の正答率が区平均正答率を下回り、「伝統文化、先人の働き」についても正答率が低く、指導の工夫が必要である。	生活との関連が見えにくい内容については、写真等の資料や動画視聴等、視覚的に捉えられるようにする。また、現在の自分の生活と比較したり関連付けたりして身近なこととして考え、表現できるようにしていく。その際、用語の意味を正しく理解できるようにする。	地形や気候の特色や自分の生活との関連を柱に、様々な産業について同じ視点をもって調べたり、関連付けて考えたことや気づきをまとめたりする活動を計画的に進める。複数の単元の学習内容を繰り返し扱うことで、知識と体験を結び付けて、実感を伴って理解できるようにする。
6年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、領域別正答率では、「国土の自然などの様子」の正答率が昨年度校内平均正答率をやや下回った。児童の実態に合わせた指導の工夫が必要である。	教科書に載っている資料やグラフから事実を適切に読み取れるようにしていく。また、用語などの基礎的な知識を定着させ、意味も適切に理解できるようにする。	歴史学習では史実だけでなく、その背景や裏に隠されている事実などを調べる機会を設けて、児童の興味を広げる。単元のまとめでは、学習した内容を整理し、自分の知りたいことを深く調べる、新聞づくりなどの学習を取り入れる。

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	加法、減法の計算を正しくできる児童が多い。しかし、ブロックなどの半具体物を操作して、計算する児童もいる。また、文章題から必要な情報を読み取り、正しく立式するのが難しい様子が見られる。順序を表すことを苦手とする児童が多い。	計算カードやプリントで繰り返し計算の練習をする。加法、減法の文章問題では、問題の意味を読み取る練習をする。答えを出すのに必要な情報を得られるように、文章の意味を一つ一つ確認しながら、読み進めていく。列に並ぶなど、生活の中で順序を表すことに触れていく。	様々な場面の文章題に取り組ませる。場面を的確に捉え、ブロックなどを使って操作活動することを繰り返し行う。計算のプリントだけではなく、文章題のプリントを用意する。プリントとドリルを使用して、単元終了後も繰り返し復習させ、文章題に慣れさせていく。
2年	校内平均正答率は、すべての内容において、目標値および区平均正答率・全国平均正答率を上回っていたが、平均まで達していない児童も数名いるため、個別の指導が必要である。	「ながさ・かさ」の単元では、単位換算が困難な児童が見られた。また、たしざんやひきざんでは、繰り上がりや繰り下がりのある計算の正答率の低い児童が見られた。類似問題の掲載されている補充プリントに取り組み、問題に慣れていくようにする。	細やかな指導を行い、教科書やプリントの問題を解くだけでなく、説明や発表にも時間を確保する。また、デジタルコンテンツを活用し、個に応じた課題を設定し、類似問題に児童が取り組めるようにする。
3年	内容・観点ともに区の平均正答率を10ポイント以上上回った。しかし個別に見ると平均正答率に達していない児童も数名いる。上位層と下位層では差が大きい。必要に応じて個別に指導・支援を行う必要がある。	児童の実態に応じた補充問題を用意する。具体的には、きたコンでのデジタルコンテンツを活用する。また、習熟度別指導の振り分け方も工夫し、「じっくり」はさらに少人数に、「しっかり」にも上位の子を振り分けリーダーシップがとれるようにするなど、児童が互いに見合ったり、教員が個別に指導しやすくなり、安心して活用できる学習形態を作っていく。	自分の力で考える時間や友達と話し合い考えを深める時間を設定し、児童が十分に問題に向き合える時間を確保する。また、児童が自らの習熟度に合った学習に取り組めるように、教科書の復習問題だけでなく、デジタルコンテンツを活用する。
4年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、領域別正答率では、「図形」が他の領域に比べて正答率が低い。上位層と下位層の差が大きい。基礎基本の定着を図るための個別指導の工夫が必要である。	図形の学習では、図に用語や数量を書き入れる活動を丁寧に行うことで、図形に対する理解を深める。また、下位層の児童らが習得できるように、三角定規やコンパスなどの使い方をきたコンを使い各自で動画教材等を繰り返し視聴し、視覚的に学べるようにする。	個別最適化を図るため、教科書の問題だけでなく、プリントやデジタル教材等を活用して、個に応じた課題を設定する。また、はじめから図形を作図するのではなく、児童が角度を求めたりコンパスで円を描いたりといった、基礎的な技能を練習する時間を設ける。
5年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、領域別正答率では、「図形」が他の領域に比べて正答率が低く、指導の工夫が必要である。	図形理解の基礎となる用語や、測定の仕方など、丁寧に指導し、定着を図る。分度器の目盛りの読み方については、図りたい角の大きさを正しく捉えたり、正確にあてたりできるようにしていく。合同や角の大きさの指導の際も繰り返し確認をすることで、技能の定着を図る。	計算のきまりを活用することや、もとにする大きさを変えて数を見ること、数直線を用いて数量関係を捉えて立式すること等、既習を生かして問題解決に取り組むようにする。習熟度別指導において、コースに応じた課題を工夫し、一人一人の理解を確実にしていく。
6年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、領域別正答率では、「データの活用」の正答率が他の領域に比べて、正答率が低く、指導の工夫が必要である。	内容別正答率で51.2%と他の内容より低い「データの活用」の学習場面では、個人でデータを考察し事実をつかみ、つかんだ事実の共有をし、理解を深める。ドットプロットや代表値、ヒストグラムなどの新出用語の理解を深め、統計教育の充実を図る。	プリントを用いて、繰り返し問題を解き、データの活用に関する学習に触れる機会を設ける。習熟度別指導で児童の進度に合わせて、復習や補充問題を用意したり、問題数を調整したりして、理解を確実にしていく。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（理 科）

東京都北区立赤羽台西小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	新しく始まった教科なので、興味と関心をもって学習に取り組んでいる児童が多い。取り扱う課題が自然科学の分野であるため、児童の身の回りのことを学習しており、これまで生活科で学習した知識が、さらに深化する喜びを感じている姿が見られる。	現段階では、観察する活動が主だったため、見たことを細かに記録することができた。生きものを扱うため実物を見られず教科書の写真やデジタルコンテンツに頼る内容となってしまったため、できるだけ実物を観察できる環境作りを行う。	今後の学習は、自然科学の分野の中でも実験を伴う学習となってくるため、どのように課題を設定し、実験（または観察）を通して結果を得て、考察していくという一連の理科的な流れの基礎を身に付けていく。
4年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。また、領域別正答率においても区平均を上回っている。一方で、区の平均正答率に達していない児童も見られるため、指導の工夫が必要である。	実験や観察したことを、他のことにどう応用できるのかを単元の振り返りで考えたり、単元の導入時に既知の知識をできるだけ出せるようにする。また、考察をする際に考えの根拠を言語化できるよう指導したり、友達の考え方を聞いて自分の考えと比較できるように指導する。	日常生活と結び付けたり、映像資料を使って学習の振り返りを行ったりして、学習内容の定着を図る。また、実験を通して実際に自分で操作することで実感をもって結果を確認できるような機会を多く設ける。
5年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を上回っている。領域別正答率においては「1年間の動物のようす」「電気のはたらき」の平均正答率が、区や全国平均に比べて下回っており、指導の工夫が必要である。	実際に飼育できない動物の様子については、資料の読み取りや動画視聴だけでなく、比較したりまとめたりするような思考、表現を伴う活動を丁寧に扱い、体験を補うようにする。「電流が生み出す力」の学習では、4年生までの、磁石や電池、電流の学習を振り返り。電磁石の性質についても、実験を通してより体感できるようにする。	学習したこと日常生活とを結び付けることで、学習内容の定着を図っていく。新しく学ぶ理科の言葉を正しく理解し、その言葉を適切に使って思考を表現できるようにする。また映像資料などを使って学習の振り返りを行い、学習内容の確認をしていく。
6年	教科の正答率は、「基礎」、「応用」とも北区や全国の平均正答率を大きく上回っている。しかし、内容別正答率では、「魚のたんじょう」の正答率が区や全国平均と比べて下回り、観察実験の丁寧な指導が必要である。	植物や生き物を扱う単元では、理科支援員と連携し、児童の体験の充実を図る。観察実験を継続的に体験させ、学んだことを共有し、映像資料や教科書を結び付けて、知識を獲得できるように授業を進める。	学習したことを活用して、日常生活と結び付けることで、学習内容の定着を図っていく。また映像資料などを使って学習の振り返りを行い、学習内容の確認をしていく。